

検討(4) ヒロハテンナンショウ群とシ
コクヒロハテンナンショウ群. 植物分類
地理 32: 22-30.

——— 1986. ユモトマムシグサ(広義)の
分類. 植物研究雑誌 61: 22-29.

——— 1988a. 日本のマムシグサの形態と
分布. Newton special issue 植物の世界
(2): 78-79.

——— 1988b. 岐阜県のテンナンショウ属.
岐阜県植物研究会誌 5: 1-14.

杉本願一 1973. 日本草本植物総検索誌 单子
葉篇. 井上書店 630頁.

追記 長野県産のテンナンショウ属の概要
はおおむね以上のとおりであるが、引用標本
の採集年月日からもわかるように最近10年間
はほとんど長野県内を歩いていないため、一
部詰めの甘いところが残されている。近年進
展の著しい分子情報からの裏付けも、今後の
課題である。いずれにしてもテンナンショウ
属は地理的な分化の著しい植物群であるので、
各種の分布をまとめておく必要がある。私が
採集していない区画の標本があれば、お送り
いただければ幸いである。

白根葵の生育報告

大平 仁一

Jin-ichi Ohira: Reports on cultivation of *Glaucidium palmatum*

1989年春、新潟県境に近い、標高900 mで、
一帯がブナ林に囲まれ、苔むした岩をぬって
清流の音がたわたり、かすかな木々の間から
差す太陽の光と風にゆれている、紺碧色で5分
咲きのシラネアオイの自生地を見ることが出来た。

こんな妖精の様な深山の花を育てる事が出来たらと、そんな発想から始めた調査である。

9月中旬、薄褐色の堅い殻にしっかりとつ
つまれた種子を殻のまま採取してくる。1週
間程度、自然乾燥し、10月下旬、プランタ
ーに鹿沼土を詰めて種子をまく。

標高340 m、土壌、湿度等々、全て異な
った自然環境の中で発芽することは困難では
ないかと半信半疑で春を待つ。

翌年5月下旬、発芽する。出来るだけ、一
日中直射日光をさけ本陰に鉢を置く。子葉は
直径1.2 cm程度の2枚丸葉で、約80%の発芽
率であった(図1、図2)。

2年目の個体は、5月下旬、鋸歯のある葉

が、1枚あるものと、2枚あるものと様々で
あったが、2枚の葉のあるものが多かった
(図3)。

3年目の個体は、3枚葉、4枚葉となり、
葉の色もこく、茎もがっちりと堅くなる。53
個体発芽した中からようやく3年目にして薄
紫色の花をつけた(図4)。

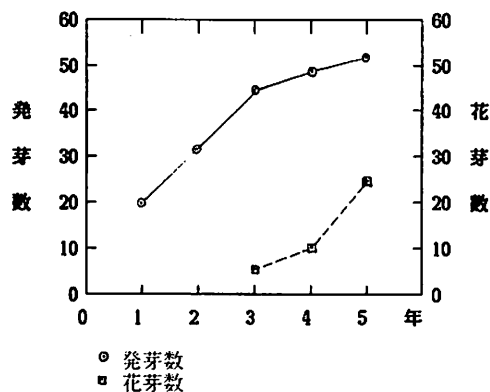


図1. 種子蒔き後の発芽数と花芽数の推移



図2. 翌年発芽したシラネアオイの実生



図3. 2年目のシラネアオイ



図4. 3年目に開花したシラネアオイ